［別紙２］

論文審査の結果の要旨

申請者氏名　原（福與）　珠里

日本の農村地域は、男女共同参画の視点からは多くの問題が指摘されているが、最近は農村女性の様々な活動が注目されるようになっている。その背景には、従来の地縁血縁にしばられない新しい社会関係の形成の動きがある。しかし、農村女性の社会関係の実態に関しては、これまできわめて研究が少ないのが現状である。

本論文は、社会学の方法であるパーソナルネットワーク論を用いて、農村女性の社会関係に関する多くの地域での精密な実態調査を通じて、農村内外から農村ならびに農業に参入する女性たちの新しい社会関係を動態的・実証的に分析した研究の成果である。

第１章で農村女性に関するこれまでの多くの先行研究、ならびにアメリカで豊富な研究蓄積を有するパーソナルネットワーク論の研究成果をレビューした後、第２章では、婚姻を契機にした女性の農家生活への適応過程が分析されている。その結果、集落内の同年代の女性による基本的な集団が受け皿として未だ重要な役割を果たしていること、また婚姻以前からのネットワーク、特に実家から受けるサポートは、農家出身者でより多重送信的であること、逆に、夫からのサポートは非農家出身者でより多重送信的であることが明らかにされている。また、新たなネットワークを形成しようとする意欲は、非農家出身者で強いが、その契機は未だ多様とはいえず、趣味や子ども関係など同質的なものが多いことが指摘されている。

第３章では、適応後の農村女性のパーソナルネットワークが分析され、従来の農村女性のパーソナルネットワークについての仮説（親族比率が高い、近隣比率が高い、規模が小さい、密度が高い、多重送信性が高い、同質的である、持続的である）はある程度妥当性があること、しかし、パーソナルネットワーク全体に占める近隣・親族比率については個人差が大きいこと、そしてこのことは、近隣ネットワークの基礎として位置づけられてきた集落内のネットワークの重要性は個人によって異なることを明らかにしている。

また、農村女性によるパーソナルネットワーク形成のあり方を規定する外的要因としては、居住地の利便性、居住地域における組織のありかた、地域おこしや各種の講習会など様々な社会的装置など、その一方で内的要因としては、女性のライフステージによる家族のあり方（世話や介護が必要な家族の有無）や年齢などがあることが明らかにされている。なお、分析の中で、沖縄農村における地域文化が女性のパーソナルネットワーク形成に大きく影響を与えていることが明らかにされている。

第４章では、農業へ新規参入する女性のパーソナルネットワークが分析され、彼女らは地域における親族ネットワークが存在しないだけでなく、価値観の違いなどから近隣ネットワークへの参入も困難な場合もあり、このため、就農以前や就農後に形成された広域的なネットワークが、情報や情緒的なサポートの動員源としてきわめて重要であること、そしてむしろ非農家とのネットワークを重視していることが明らかにされている。

新規参入した女性たちは、自分自身で就農を決断した場合と、夫の決断に従った場合とで、研修経験や生活満足度などに違いがあり、夫に従属した場合はより困難な適応過程を経験していること、しかし、組織加入等を契機とするパーソナルネットワーク形成に関しては、両者間に顕著な違いはなく、むしろ新規参入者を受け入れる地域社会の側に、加入を限定するような構造が未だ存在することが指摘されている。

第５章の総括では、混住化や兼業化の進展の中で、女性たちにとっても「ムラ」すなわち集落の機能が低下してきたことには議論の余地がないが、集落における年齢集団の意義は失われておらず、農村に参入してくる女性たちを「公的に迎える組織」として、また地域におけるネットワーク形成の入り口として機能していることを指摘し、婚姻による参入であれ、農業への新規参入による地域社会への参入であれ、女性たちは移住以前からのネットワークも動員しながら、地域社会におけるネットワークを形成していると結んでいる。また、伝統的な年齢集団への参加以外のネットワーク形成の道を女性たちは模索しているが、未だ多様な選択肢は与えられていないことを問題として指摘している。

以上、本論文は、パーソナルネットワーク論を用いて農村内外から農村ならびに農業に参入する女性たちの新たな社会関係を体系的に解明したものであり、学術上、応用上貢献するところが少なくない。よって審査委員一同は本論文が博士（農学）の学位論文として価値あるものと認めた。